

金星人オムネク・オネク

「私は金星から体の波動を落として地球へやってきた」

はじめに (訳者 益子祐司)

ここではオムネクがインタビューや本の中で語った内容と、それに似通っているコンタクティのジョージ・アダムスキーやワード・メンジャーからの情報を対比させながらご紹介します。彼女の発言内容は私が要旨をまとめたもので、実際の発言や記述をそのまま翻訳したものではありません。インタビュアーは、ロシア人のマリナ・ポポビッチ博士で、博士はロシア軍初の女性テストパイロットとして航空記録も樹立した有名な方ですが、一九八九年にロシアの火星探査機フォボス二号が火星の衛星付近で謎の突然消滅をした際の直前映像に、巨大な葉巻型母船のような物体が写っていたことを解説していた著名なUFO研究家でもあります。

オムネク 私が地球に来たのは一九五〇年代の初めの頃です。地球に来る前、私は金星での私の精神的な指導者と私を育ててくれた人たちから、ある提案をされました。それは、地球へ行って子供として育てられ、成長していく過程を通して、地球の人と同じ立場で、彼らの意識の状態、先入観や偏見、複雑に入り組んだ状況やさまざまな宗教についての理解を深めてみなよかという試みでした。同時に、太古の昔から地球とかがわってきた金星人、つまり一部の地球人の祖先でもある私たちの種族についての情報をもたらしながら人々を啓蒙するという役割も担うものでした。

訳注「彼らは私たちの祖先である」とメンジャーも語っていて、次のように述べています

「他の惑星から非常に多くの人々が地球に来て、私たちに紛れて暮らしている。宇宙船に乗って直接来る者もいれば、生まれ変わらして来る者もある。それはあなた方の隣人かもしれないし、スーパーやレストランであなた方に接客する人かもしれない。彼らは私たちが生命や生きる意味についての理解を深め、自らを成長させるのを手助けするために、愛と慈悲の心をもって地球にやってきているのだ」

オムネク 私は地球に行く決意をし、レッツという町へ行きました。そこは、金星で唯一、三次元とアストラル界に同時に存在する場所なのです。私は自分のアストラル体のバイブレーション（波動）を落とし（低くし）、三次元の肉体を顕現させ、金星の家族に別れを告げました。そしてスカウト・シップ（偵察用円盤）と私たちが呼ぶ小型宇宙船に乗り込み、金星の地表を飛び立ちました。レッツの町は天空をドームに覆われています。ドームの周囲はガスや炎で覆われていますので、離れた場所から町の様子を見ることはできません。

訳注 マンジャーは月面旅行に連れて行かれた際に、月面の環境に体が適応できるように、宇宙船内でおおよそ十日間の適応処置を受けています。また、進化した惑星から地球へ「魂、が生まれ変わる場合も「魂はその周波数を、いわば」後退させて、生まれ変わらなければならぬ。そして地球に転生した多くの人たちは、過去世の記憶をなかなか思い出せず、前世の仲間と会っても気がつかないことが多い」と述べています。

オムネク 小型宇宙船は上空で待機する巨大な葉巻型の母船内へと入って行きました。宇宙船は磁気の波動を帯びていて、時間旅行をするので、肉眼では見えなくなります。地球へはおおよそ二四時間で到着します。私が再び母船内の小型宇宙船に搭乗する際に、乗組員から、私は最初はチベットのモンテソーリ山へ行き、そこで僧侶たちと暮らしながら、地球社会で生活するための準備をすることになると告げられました。

訳注 マンジャーは、自分自身の考えとして「宇宙船はタイム・トラベル(時間旅行)をしているのだらう」と述べています。また「宇宙船のバイブレーションが上昇すると肉眼では見えなくなる。これは扇風機の羽が高速回転すると消えたように見えるのと同じだ」と説明していますが、これはアダムスキーも全く同じ扇風機の喩えて説明しています。

オムネク チベット僧たちはとても精神的に覚醒していたので、彼らとの暮らしに不都合はなかったのですが、私はまだ慣れない三次元の肉体の扱いにとても大変な思いをしました。まるで重たい鎧(よろい)を身に着けているように感じたのです。最初は歩くことすらままならず、声帯を使って声を出すことにも苦労しました。私は歩行のバランスがうまく取れず、よく転んで擦り傷をこしらえていたものです。肉体の感じる苦痛というものに私はなかなか慣れることができませんでした。また、アストラル体では私は全方向の視界を持っていたのに、ここでは視野が限定されてしまうことにも不自由さを感じました。それから、三次元の世界では、何か物質的なものを手にするには、肉体的な努力をしなければいけないことにも気づきました。食べ物や本など、何でもです。アストラル界では、ただ必要な物を心に思い描くだけで、それらを物質化することができたのです(訳注 アストラル界の物質は三次元の物質とは波動が異なる)。最初は何かかも大変に辛かったのです。

やがて私は、地球の社会に入り込んで暮らすために、米国テネシー州のある一般家庭の養女になりました。ちょうどその家庭の七歳の女の子が交通事故で亡くなってしまったからです。ただ、実際の育ての親は祖母で、両親については祖母から話を聞くまでは、あまり多くのことを知りませんでした。いろいろと複雑な家庭事情があったようです。私はその後成長してシカゴに移り、さまざまな職業に就きながら、結婚して三人の子供を育てました。そして一九九〇年に、金星の指導者たちのアドバイスにより、自分の素

性を公にし、人々に平和と人類愛のメッセージを伝える活動を始めました。

訳注 メンジャーが敬愛するジョージ・アダムスキーは、八歳の頃に親元を離れてチベットへ留学させられ、そこで数年間を過ごしたといわれます。なぜそのような幼い子供を一人で遠い東洋の地へ送ったのか、謎とされていますが、一人の宇宙人の男性がチベットまで付き添ったという話もあります。また、これはアダムスキーの側近であった二人の人物(一人は古くからの彼の文通相手のエマ・マーティネリ女史、もう一人は、彼の右腕と言われ、宇宙人たちの承認の元に彼の後継者として公式に発表されたキャロル・ニー氏)の証言として、アダムスキーは赤ん坊の頃に宇宙船で金星から地球に連れてこられたという驚くべき情報もあり、オムネクとの境遇の一致は偶然とはなかなか思えません。しかも、ニーの証言は、私(訳者)が本人から直接聞いたものです。なお、アダムスキー自身はメンジャーの体験について肯定も否定もしていません(メンジャーは私の数時間の講義に参加したが、自分の体験については何も語らなかった。彼の体験については、まだ宇宙人たちから何も聞いていない)と述べています。ちなみにメンジャーはアダムスキーより三十一歳年下です。また、訳者がメンジャーにアダムスキーと会った時の記憶を尋ねたところ、次のように答えてくれました。

「当時私のマネージャーであったレスター・レヴィンソンが、私が講演旅行中にジョージ・アダムスキーと短時間会えるように手配してくれました。私たちがカリフォルニアのジョージの自宅を訪れた際には部屋には二人の若い男性がいて、床に座って話を聞いていました。のちにレスターはその内の一人は金星人のオーソンではなかったかと推測していました。私たちは皆でパロマー山の天文台へ行き、ふもとを散策しました。そこはジョージ・アダムスキーが望遠鏡に取り付けたカメラで宇宙船の写真を撮ったところでした。ジョージと過ごしたこの短いひとときの後、私は彼に『貴方にお会いできて非常に光栄です』と言いました。私はジョージにわざわざおこまりがあったことを覚えています。会話の内容は思い出せません。彼はとても親切で好感の持てる人物でした」

オムネク 私は今でも私の母星(金星)の人たちと時おりコンタクトを取っています。それは主にテレパシーによるもので、簡単な言葉や挨拶のようなものです。ただ一度、肉体の病気になってしまった時に、私はネバダ州の砂漠に連れて行かれて、そこからスカウト・シップに乗って、三次元の肉眼では見えない領域に運ばれ、処置を受けました。鎮静剤のようなものを与えられ、安らいで眠っている状態で治療を受けました。また、私たちにはヒーリング能力もあります。ただ、私自身はあまり人にヒーリングはしません。そこには精神の法則が関わってくるからです。人は病気になることで、そこから学びを得ることがあります。ですからその貴重なレッスンの機会を奪わないために、私はヒーリングを頻繁には行わないのです。

訳注 メンジャーは、宇宙人から「肉体の原子のバランスを調整して病気などを治す機械」について教えられていますが、宇宙人の惑星には医者も病院もなく、各自の心が宇宙の創造主と一体化しているため、病気になることも無いといえます。ただし、太陽光線からの有害な放射線を受けぬことも重大な要因であるらしく、進化した宇宙人でも地球に滞在す

るうちに体調を崩すこともあり、有害光線を避けるためにサングラスをしている宇宙人もいると言います。地球も太古の昔は上空を厚い雲が覆っていて、直射日光が射すことなかったため、聖書の登場人物などは数百歳もの長寿をまっとうしていても言われています(現代科学の見地からもその可能性は指摘されています)。以上のことはアダムスキーもほぼ同じ説明を宇宙人から受けています。アダムスキーによれば、宇宙人から与えられた「万能治療器」が実際にニューヨークのある病院へ渡されかけたが、医療機関や製薬会社からの圧力で、闇に葬られたと云うことです。

オムネク 私たちはテレパシーで会話をします。地球の人たちは、肉体というものにあまりにも閉じ込められてしまっていて、より高いレベルの次元とコミュニケーションが取れなくなっています。地球人が言葉でしか意思を伝え合えないことに私はとても驚きました。

訳注 マンジャーは、三次元の肉体に束縛されている地球人とテレパシー能力の関係についてスペース・ピープル(宇宙人)が彼に語ったことを次のように紹介しています —

「私たちが存在している三次元世界は、肉眼が知覚している幻影の一部に過ぎないのです。肉体とは、魂がその惑星に存在している期間に、心に反映して表現している三次元のバイブレーションでしかありません。ほとんどの地球人は肉体に捕らわれている囚人のようです。テレパシーとは単なる脳波の送受信であって、テレパシーでコミュニケーションする二人の人物は自らの肉体に束縛されておらず、時間からも自由なのです。彼らは物理的な三次元の世界にいながら、同時に四次元をも反映していますが、それで三次元世界が壊れることはありません。彼らは無時間の領域において、三次元と四次元を同時に意識しているのです。太古の地球人は脳の下部にある「腺」が発達していて、自然な能力としてテレパシーを使っていたのですが、やがて通信技術という松葉杖に頼るようになり、だいにその能力は退化していきました。テレポーテーションとは、脳下部の腺と五つの感覚器官の全てを用いて、リラックスした状態で三次元世界を写真のように感知することです。言い換えれば、テレポーテーションする目的地を完璧なまでに生き生きとイメージして、心をその光景の一部にすることなのです」

オムネク 金星人も肉体(アストラル体)を持っていますが、清らかな外見をしているために、聖書などでは天使として描かれてきました。特徴としては、頭蓋骨の形が少し違って、額が広く、山脈のように隆起しているところがあり(訳注 髪の毛の生え際からこめかみあたりを彼女は手で示す)。目が大きく、そして指は中指に向かって他の指がカーブを描いていて、ちょうどキャンドルの炎のようになっています(訳注 本当にそのように見える長い指を彼女は自分の顔の前に示す)。けれど、あなた方も自分たちの中に私たちと似た特徴を見出すことができるでしょう。なぜなら、私たち種族はあなた方の祖先であり、その後には他の血が混じることにはあっても、遺伝子は引き継がれているのです。その他の違いとしては、私たちは地球人よりも心臓の鼓動が速く、また妊娠期間も長めになります。先ほどもお話したレッツという町は、金星上でただ一カ

所だけ、三次元の物理的世界とアストラル次元に同時に存在しているところです。そこはネバダ州の砂漠地帯の気候にかなりよく似ていて、とても乾燥しています。けれども、気候をコントロールしているドーム内にありますので、非常に快適な環境です。アストラル界には、多くの植物があります。なぜなら、環境は私たちの想念によって創造されるからです。寝室の中を吹き抜けのように伸びる木を生やすこともできれば、家の中を流れるいくつもの小滝を作ることもできます。そのほか、広大な庭園やさまざまな植物や動物など、地球上で見るのと同じような環境を作り出しているのです。違いはほとんどありません。食べ物も似たようなものです。地球にあるトウモロコシやヒマワリは、今から何千年も前に、金星からもたらされた植物の中の一つです。金星の植物の中には地球の環境でも育つものもあるのです。このように、アストラル次元と地球の環境の差はあまりないのですが、あるとすれば、何にしても私たちのほうがより豊富に持つことができるということです。

訳注 マンジャーは金星の環境は地球のカリフォルニアや南アメリカの一部に良く似ていると云えます(アダムスキーはフロリダで云えます)。たゞ彼自身は金星の様子を円盤内の立体映像(ホログラムのようなもの)で見せられているだけで、それが三次元の姿なのかアストラル界のものであるのかは分かりません。また、ヒマワリや白鳥は金星からもたらされたという話がアダムスキー方面からの情報にもあります。

オムネク 私たち金星人は確かに三次元の物理的な存在ではありません。しかし、それを超えた次元に存在しているというだけの違いです。金星人の女性も同じように子供を産みます。私は自分が母親の子宮にいたことも、産まれた時のことも覚えています。アストラル次元にいても、三次元の肉体にいるのと同様に、すべては現実的なものとして感じられるのです。アストラル界でテーブルなどを触れても、とても堅い物体として感じられます。しかし三次元の肉体をもつ人がアストラル次元のものに触れようとしても、まるで指の中をすり抜けていくように感じるだけでしょう。私たちの体はそれぞれの惑星に応じたバイブレーション(波動)で出来ているのです。

訳注 オムネクの言う「アストラル体」というのは、形を持たない霊と言うよりは肉体に近いものです。このあたりが、いわゆる体を持たない「霊的」な宇宙人と「チャネリング」をしていると主張するコンタクトと、オムネク、マンジャー、アダムスキーのような「肉体」を伴ったコンタクトとが線画しているところです。マンジャーは惑星のバイブレーションについて次のように述べています。「金星と土星のバイブレーションは地球よりずっと高く、肉体も構造もより希薄なものとなっている。もし地球人が他の惑星の環境への適応処置を施されることがなく、今の物理的な身体のまま金星や土星を訪れたとしたら、おそらく自分より高いバイブレーションで振動している生命体を肉眼で見ることができないかもしれない。金星と土星のバイブレーションの振動数はとても近いので、彼ら同士はお互いを見ることができ、文明も互換性がある」

オムネク 最後に地球の皆さんへのメッセージとして伝えたいのは、まず私たちの太陽系または他の太陽系からの訪問者たちに対して、あまり恐怖心を持たないでほしいということです。そのために私も何らかのことができればと願っています。私たちは兄弟姉妹であって、ずっと昔からこの地球に来ていて、あなた方が他の太陽系から来る異星人たちからいかなる種類の危害も受けないように守ってきているのです。私たちは、地球人が意識のレベルを向上させて、私たちの保護が必要ではなくなった時には、進んだテクノロジーを提供するつもりです。そうすることで、あなた方は他の惑星を訪問することが可能になり、別の種族を攻撃するためではなく、太陽系の惑星の調査のために宇宙空間へ旅立つことになるでしょう。全ての種族はお互いを尊敬し合い、国の違いに関係なく、人類としての一つの意識にまとまることで、私たちは本来享受できるはずの、広大な、そしてシンプルで優美な人生を送ることができるのです。